

ダンディズム試論(1)

佐藤 東洋磨*

Propos sur le dandysme (1)

Toyomaro SATO*

RÉSUMÉ

Parmi des fruits éblouissants sur le dandysme ou le dandy, choisissons comme point de départ un texte de Barbey d'Aureville, intitulé *Du dandysme et de George Brummell*, qui parut en 1845. Il est possible également de parler d'un essai de Charles Baudelaire, *Le peintre de la vie moderne* (1863), car le poète des *Fleurs du Mal* y mit en lumière le dandy, au chapitre 9 en particulier. On y trouve de belles phrases bien connues: "Le dandysme est un soleil couchant; comme l'astre qui décline, il est superbe, sans chaleur et plein de mélancolie." Et pourtant, nous avons une preuve que Baudelaire avait lu et relu ce texte de Barbey d'Aureville, parce que dans sa critique d'art *Salon de 1846*, le poète dit précisément: "En relisant le livre du Dandysme, par M. Jules Barbey d'Aureville, le lecteur verra clairement que le dandysme est une chose moderne."

Or, on sait bien cette phrase de Thomas Carlyle dans son *Sartor Resartus* (1833-34): "Every faculty of his (dandy's) soul, spirit, purse and person is heroically consecrated to this one object, the wearing of Clothes wisely and well." Voilà un avis typique sur le dandysme, mais le dandysme de surface.

Barbey d'Aureville ne consentira point à cet avis de Carlyle. Alors que pour le dernier, le dandysme n'est qu'une élégance extérieure à la mode, pour notre auteur, le dandy est avant tout celui qui veut toujours produire l'imprévu en gardant l'impassibilité, non par une action excentrique, mais par une attitude de sang-froid envers le monde. Ce dandy se moque profondément de l'ordre établi dans une société, mais il ne lève pas un étendard de révolte d'une manière directe. Il s'ennuie d'une résistance passionnée, et il veut seulement se venger de la règle "tout en la subissant."

* フランス語教室 (Dept. of French)

Toujours dans un rôle, le dandy selon Barbey d'Aurevilly n'est jamais vraiment lui-même. Ce comédien orgueilleux, qui possède une intelligence pénétrante et une aptitude profonde à deviner la vulgarité du moude, cache bien des douleurs: "Ces stoïcien orgueilleux de boudoir boivent dans leur masque leur sang qui coule, et restent masqués." On verra enfin chez Barbey d'Aurevilly une séparation absolue du dandysme et de l'élégance extérieure. Grâce à ce divorce audacieux entre ces deux mots, le mot *dandysme* fut bien enrichi pour aller jusqu' à avoir le sens spirituel et *stoïcien*.

なお、本文中でボードレールの作品、書簡からの引用は、下記の略記号で示した。

BOP I: Baudelaire, Oeuvres complètes I, Biblio. de la Pléiade, Gallimard, 1975.

BOP II: 同上, II, 1976.

BCP I: Baudelaire, Correspondance I, Biblio. de la Pléiade, Gallimard, 1973.

BCP II: 同上, II, 1973.

1. はなやかな装いは、いつのまにか消えてしまう。18世紀後半から19世紀初頭にかけて、浮かんでは沈み、また現れては隠れていった洒落男や伊達男たち。そのふるまいやファッションに関して用いられた「バック」Buck だの、「ブラッド」Blood だの、1786年ごろにはマカロニ・クラブさえあったというイギリスのイタリアふう伊達男を指す「マカロニ」Macaroni だの、1796年ごろのフランス執政政府時代の洒落男を言う「アंकローワイアブル」Incroyable だの、あれこれの用語は、時の流れにおしやられた。

そして年月のひだを通りぬけて、「ダンディ」Dandy だけがいまなお口の端にのぼり、強烈な、かすかな薫りとなって世紀のはざまをたなびく。ロンドンという舞台で、ブランメルやバイロンやリットンが華麗なダンディ伝説をつくりあげた19世紀はじめの30年間、やがてそれは英仏海峡をわたり、作家のメリメやスタンダールやバルザックがそれぞれに創りだしたサン＝クレール、ジュリアン・ソレル、リュシアン・ドゥ・リュバンプレ等々の登場人物に息をふきこんだのであった。そして1878年、ようやくフランス学士院がこの用語「ダンディ」を認知するまで、われわれはその語にたくされるさまざまな像を見るのだ。もとより、ひとりの人間の外観や精神や生きかたをただ1語で集約しようとするとき、それは場合によってとりどりの色彩をおび、種々のひびきを発するだろう。

しかしとりあえず、見かけのダンディがある。19世紀のフランスを代表する言語学者のひとりエミール・リトレの『フランス語辞典』(Emile Littré, Dictionnaire de la langue française, 1863-73) の定義は、簡潔明瞭であり、この語に多義性のはいりこむ余地はない。

ダンディ、身づくろいに凝り、こっけいなほどモードを誇張する男。

(dandy, Homme recherché dans sa toilette et exagérant les modes jusqu'au

ridicule.)

この定義からは、たとえばミュッセが 1838 年に発表したみじかい小説の主人公フレデリックなどが思いだされる。

彼はカフェで夕食をとり、ブローニュの森に出かけ、きれいな衣服を身につけポケットには金をつめこんでいるのが常であった。さて完全な「ダンディ」になりきるには、1頭の馬とひとりの愛人が欠けているだけだった。

…il dînait au café, allait au Bois, avait de beaux habits et de l'or dans ses poches; il ne lui manquait qu'un cheval et une maîtresse pour être un dandy accompli. (Alfred de Musset, *Frédéric et Bernerette*, Oeuvres complète en prose, Bibliothèque de la Pléiade, 1960, p. 467)

あるいは 1830 年にバルザックが『流行』*La Mode* 誌に 5 回ほど連載したエッセイ、「優雅な生活概論」を読んでもよい。ここで作家は、人間の階層を 3 つに分類した。

労働する人間 L'homme qui travaille,

考える人間 L'homme qui pense,

何もしない人間 L'homme qui ne fait rien.

そしてこの 3 種の人間が過ごす生活は、つぎの 3 つになる、と整理するのである。

仕事に追われる生活 La vie occupée,

芸術家の生活 La vie d'artiste,

優雅な生活 La vie élégante.

さてバルザックの見解では、優雅な生活とは「外見上の、そして物質的な生活の完成」にほかならず、「ダンディズムとは、優雅な生活の異端である」。こうして読みすすむと、彼の念頭を占めるダンディ像は、富裕な財産を背景にしたセンスのすぐれた人物であって、今日においても、こうしたイメージはもっとも普遍化したものである、と言うことができるだろう。青年期に事業で巨額な負債を負って、一生それに追われながら、1日 50 杯のコーヒーで睡気とたたかい、28 年間におよそ 150 編の小説を書いて 51 歳で死んだバルザック自身が、彼の考えるダンディであり得なかったことは言うまでもない。

2. 見かけのダンディのつぎに、ひややかで悲哀感をただよわせたそれが現れる。「ダンディズム」とよぶにあたいするような、一種の精神性を獲得してくるのは、いつのころからであろうか。ひとがただちに想起するのは、シャルル・ボードレルである。現代の小辞典『プティ・ロベール』をひらいても、

ダンディズム, (19 世紀) エレガントな態度, ダンディの洗練。「ダンディズムとは身づくろいや、物質的なエレガンスを常軌を逸してまで追求する嗜好ではない。そう

したものは、完全なダンディにとって、自分の精神の貴族的な優越のひとつの象徴にすぎない」(ボードレール)

DANDYSME, Manières élégantes, raffinement du dandy (au XIXe s) «Le dandysme n'est pas... un gout immodéré de la toilette et de l'élégance matérielle. Ces choses ne sont pour le parfait dandy qu'un symbole de la supériorité aristocratique de son esprit» (Baudel.).

とあって、例文にはボードレールの美術批評、「現代生活の画家」(*Le Peintre de la vie moderne*, 1863) から引いている。そしてこのエッセイの9章「ダンディ」は、オランダ生まれのフランス人画家コンスタンタン・ギイスを論じたことなどほとんど忘れられ、もっぱらダンディの美学を定義したテキストとして飽きることなく引用されてきたのである。あるいはまた、晩年の詩人が草稿のまま遺した覚え書き、『赤裸の心』のなかの2行が、くりかえし引かれる。

「ダンディ」は絶えず崇高であろうとして渴望しなければならない。彼は鏡を前にして生き、眠らなければならない。

Le Dandy doit aspirer à être sublime sans interruption; il doit vivre et dormir devant un miroir. (*Mon cœur mis à nu*, BOP I, p. 678)

しかしながら、これらのダンディズム論がボードレールの独創的な思索の結実ではないことを、われわれはよく知っている。『現代生活の画家』が発表された1863年よりもはるか以前、詩人が詩集『悪の華』を出した1857年より11年も前に、まだ25歳をむかえたばかりのボードレールは、その美術批評『1846年のサロン』の18章「現代生活の英雄性について」でこう述べる。

ジュール・バルベール・ドールヴィイ氏の『ダンディズム論』を読みかえすと、ダンディズムとは現代の産物でありまったく新しいもろもろの原因から生じていることが、読者にははっきりとわかるだろう。

En relisant le livre *du Dandysme*, par M. Jules Barbey d'Aurevilly, le lecteur verra clairement que le dandysme est une chose moderne et qui tient à des causes tout à fait nouvelles. (BOP II, p. 494)

バルベール・ドールヴィイ、ノルマンディー地方の名門出身ながら一家の破産によって貧窮の底におちこみ、しかしあくまで貴族として孤高のプライドを守りとおしたこの小説家は、1845年、『ダンディズムおよびG.ブランメル論』というエッセイを発表して文壇の注目をあびていた。この時期にボードレールが、ダンディズム論をとりわけ熟読したであろうことは、想像にかたくない。彼自身のいわゆる「ダンディの時代」は、1844年9月、

家族がおこした民事訴訟により、法定後見人をつけられてしまったときに終わったかもしれない。だが 1842 年に 21 歳の成年に達し、実父ジョゼフ＝フランソワ・ボードレールの遺産 10 万フランを相続してから、その奔放な生活におそれをなした家族が法的に後見人をつけるまで、彼としては理想のダンディに近い生き方をしたつもりだったのだ。

セーヌ川の中島サン＝ルイ島のアパートマン、買いまくる高価な美術品、混血の愛人ジャンヌ・デュヴァル、文人や画家たちとの交遊、麻薬を味わうパーティ。すべては、44 年 9 月 21 日にくださった〈準禁治産者〉の宣告とともに幕をおろす。以後は、法定後見人の手から毎月の生活費を支給されるだけなのである。1 ヶ月 200 フラン。この金額が当時のパリでどのくらいのものであったかを、たとえば河盛好蔵氏は労作『パリの憂愁、ボードレールとその時代』(河出書房、昭和 53 年)の 6 章で報告している。1840 年ごろのカルチュ・ラタンの学生がふつう親から仕送りをうけていた額は 1 年 1500 フランであるとか 1850 年ごろのパリ市民の食費が、平均 1 年 365 フランから 460 フラン程度であるとか。ボードレールが法定後見人から渡される年間 2400 フランは、だから、一市民の収入として決して低い額ではなかったろう。われわれがもし、ブランキの『1848 年のフランスにおける労働者階級』にある建具屋の家計を読めば、眠っていてもはいってくる 2400 フランの意味は、いっそう鮮明になるだろう。「わたしは 1 日 2 フラン稼ぎます。妻はレースの女工で 1 日 0.1~0.15 フラン稼ぎます。子どもが 4 人おります。…結局、わたしたちは 1 週 12.75 フランつかいます。救済事務所から 15 日に 1 度、3 キロの黒パンを頂いています」(S. Bégué ほか、*La France et les Français autrefois*, Bordas, 1976, p. 63 に収録)。つまり労働者は、仕事が毎日あると仮定して、日曜日も返上して働き続けると、月に 60 フラン、年間 720 フランを得ることができた。この建具屋の場合、日光の射さない地下の部屋を借り(週に 1.5 フラン)肉はかろうじて週に 3 回だけわずかに食べ(0.75 フラン)バターは働き手である父親だけがつけて(0.5 フラン)、要するに生活の最低限をさまよっている。

もっとも、亡父の遺産をうけてからおよそ 18 ヶ月間でその半ばを(5 万フラン)浪費した、と母親から訴えられたボードレールにとって、1845 年からあとの経済生活は、いかにもみじめであったにちがいない。それでも彼は、45 年 2 月、画商アロンデルから 1000 フランにおよぶ絵を買いこんでいる (!)

ありあまるほどの財産がなければ、ダンディは不可能なのか、と思いをめぐらせたときにも、バルベール・ドールヴィイの『ダンディズム論』と出会ったとしたら、ボードレールはおそらく、非常に勇気づけられただろう。なぜなら、著者がみずからの理論をくみだてるのに最適な人物としてとりあげた典型的なダンディ、ジョージ・ブランメルの子で、読者がもっともつよく打たれるところは、ロンドンの社交界を圧倒したブランメルの全盛期(1794 年~1814 年)の描写ではなく、経済的破綻、国王の寵愛の消失、といったブランメルの孤独な落日の部分だからである。

たとえば、ドールヴィイが散りばめるつぎのような文、

これら閨房のストイシアンたち〔ダンディたち〕は、かれらの流れる血をかれらの仮面のうちがわで飲み、そして仮面をつけたままである。

Ces stoïciens de boudoir boivent dans leur masque leur sang qui coule, et restent masqués. (Barbey d' Aurevilly, *Du dandysme et de G. Brummell*, Alphonse Lemerre, 1879, troisième édition, p. 69)

を目にしたボードレールは、ずっとあとになって、自分のダンディ論のなかで、「ダンディズムは、精神主義やストイシズムと境を接している」(le dandysme confine au spiritualisme et au stoïcisme. BOP II, p. 710) と書くのである。むろん、これだけではない。ボードレールの『現代生活の画家』(1863) 9章にみられる「ダンディ」論のほとんどすべては、その発想の源泉をバルベイ・ドールヴィイの『ダンディズムおよび G. ブランメル論』(初版 1845) に汲んでいるだろう。したがってわれわれが検証するのは、まずこれら2つのテキストの正確な対比と、それから浮びあがる両者の近親性、それにもかかわらず滲みでるボードレールの独創性の把握である。そして最後に、「ボロを着たダンディ」の現代的な意味を探ることになるだろう。

(この項 終)